

第26回 高山市近代文学館企画展 『静修館』の文学 赤田臥牛・章齊・誠軒と二門

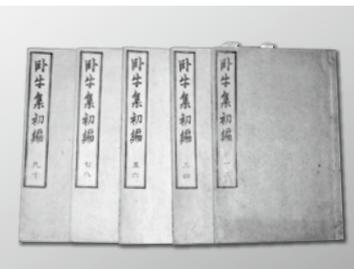
3/18(土)
19(日)

高山市文化協会は、郷土の文化を支えてきた文学者の歴史と功績を紹介し、高山の文学の発展に寄与する目的で、毎年二回「近代文学館企画展」を開催しています。

今回は、江戸後期から明治初期に高山で栄えた『静修館』に係わる文学資料を展示します。

静修館は、赤田臥牛が文化二年(一八〇五)に上一之町に開いた私塾です。天保十五年(一八四四)に馬場町、嘉永三年(一八五〇)に神明町

近代文学館講演会



江戸後期に高山で教授所「静修館」を開き、多数の門人を輩出して高山の文化を高めた赤田臥牛とその時代背景について講演をしていただきます。

赤田臥牛とその時代

平成29年
3月25日(土)
午後2時～

日時

会場 高山市図書館「煥章館」
1階生涯学習ホール

講師 福井 重治氏

定員 100名

問い合わせ (一社)高山市文化協会 Tel.34-6550

入場無料

高山市内には、赤田家三代を始めとし、その門人たちの手蹟が多数残されています。今回の展示では、そうした手蹟や資料を展示します。

高山の近代文学の礎となった「静修館」の業績を知る機会です。ぜひお越しください。

高山市文化協会は、郷土の文化を支えてきた文学者の歴史と功績を紹介し、高山の文学の発展に寄与する目的で、毎年二回「近代文学館企画展」を開催しています。

『赤田章齊』
天明四年(一七八四)生。臥牛の嫡子。臥牛の教えを受け、文政一年(一八一八)から父に代わって静修館の教



赤田臥牛の書

授。天保三年(一八三二)の大火で焼失した静修館を馬場通りに再興。その後弘化一年(一八四七)に神明町へ移転。詩文、絵画にも優れた精神の念が篤かった。弘化二年(一八四八)歿。

『赤田臥牛』
永享四年(一七四七)生。幼少より学問を好み勝久寺の瑞雲雪峰に論孟と五經の句読を受ける。津野滄州は臥牛の才能を惜しみ、尾張の松平君山、浅井因南、江戸の宇野明霞、館柳湾などに紹介した。これに師事した臥牛は飛騨において不動の地位を築く。文化二年(一八〇五)に許しを得て「静修館」を開く。皇室を尊ぶ気が篤く、津野滄州と図つて「籠の渡し」と「藤橋」の二図を描き、天覧に供した。文政五年(一八二二)歿。

『赤田誠軒』
天保二年(一八三一)生。章齊の嫡子。嘉永三年(一八五〇)十九歳で静修館において「左氏伝」を開講。明治一年(一八六八)、高山県知事梅村速水から学問取締方を命じられたが、梅村の治政方針と合わず館を閉じる。その後、遊学中に病を得て高山に戻る。明治六年(一八七三)歿。

『赤田章齊』
偶見點雲掩日照ハ
表作暗雨如絲兼
條風物東軒
好伴良生宋賦詩
春日雨集
赤田章齊

赤田章齊の書

文化協会後援 催事案内
第三十二回フェリーチエ音楽院
春のおめでとうコンサート
日時 三月十二日(日)
午後〇時三十分～

会場 文化会館小ホール
入場無料

『岡目(目)』
「砂山の砂を指で掘ってたらまっかに錆びたジャックナイフが出て来たよ」は、石原裕次郎の『錆びたナイフ』の歌詞。兄の慎太郎が弟のために書いた小説が映画化された時の歌だ。

石川啄木の「いたく錆びしピストル出でぬ、砂山の砂を指も掘りてありしに」のピストルをナイフに変えただけでも思える。何か背後に暗い犯罪が匂う。

砂山は実際にあった。函館の町は砂州の上の文字通りの砂上の楼閣。海沿いの大森海岸に啄木像があるが、その辺一帯は砂山だった。例の「われ泣きぬれて蟹とたはむる」の場所もここらしい。

ここは「サムライ集落」とも呼ばれる貧民街でもあった。昭和九年の函館大火で焼け出された人々の掘って立て小屋が立ち並び、戦後の引揚者などが身を寄せ合っていた。そこに錆びたピストルがあったら……。

優れた詩人の感性は、人々の心に「聖地」を残す。今はもう砂山はなく、ハマナスだけが揺れている。小樽の裕次郎記念館も閉じた。慎太郎ゆかりの豊洲の砂の下を掘ると……さて？

(ガンモン毛筆)